

小鍛冶

「これは三条の小鍛冶宗近にて候ふ。さてもこの度大君より、御剣を打ちて奉れと、畏き宣旨を蒙りつゝ、かゝる大事を仕らんには、われに劣らぬ相鎧の者ありてこそ、御剣も成就なすべけれ、口惜しくもそれ程の者なしと、答へ奉らんには勅諭を背くの恐れ、いかにせん。この上はわが氏の神、稻荷の神の神助を仰ぎ、頼む心に相鎧を求めんよりは他になし。南無や氏神稻荷明神、わが身命に替ゆるとも、あはれ最勝の御剣を打出させたたび給はれ」

と仰ぐ御山の初紅葉、赤き心に吹き通ふ、下向の道の夕嵐、行手の方に

老翁の、いとも気高き姿にて、忽然として現れ給ひ

「ノウ〜それなるは、三条の小鍛冶宗近にて御入り候ふか」

「不思議やな、なべてならざる御事の、わが名をさして宣ふは、いかなる人にてましますぞ」

「雲の上より御剣を打てとの仰せありしやなう」

「さればこそ、それにつけてもなほ〜不思議の御事かな。今承る勅命をはやくも知ろしめさるゝ事、返すぐも不審なれ」

「愚かや宗近。げにわれのみと知る事の、いつしか余所に隠れなき、雲井に輝う御剣の光はなか暗からん。そも〜劍の始りは、唐土にては干将獬耶、わが朝にては十握の御剣の故事を、申すも畏き尊には、東夷を討たせ給ふとて、関の東に遙々と、御下向の道すがら、駿河の国の夷ども、御狩の御遊に事寄せて、限り知られぬ萱原へ、尊を誘ひ申しける。折から富士の山嵐、つれて高なる攻め鼓、あなやと見る間に四方より、夷が放つ炎の勢ひ、尊を囲みて凄まじく、いとも危ふき御有様。その時尊は御剣を抜き、『すぐに火焰も立ち退け』と、辺り草を薙ぎ給へば、劍の精霊嵐となつて、敵の方へと吹返す。猛火は天地に満ち〜て、さしも数

万の夷ども、朝日に霜と消えてんげり。かの草薙の御剣に劣らぬばかり端相を、家に伝ふる宗近よ、とくく帰りに壇を飾り、われを待ちなばその時に、通力にて身を変じ、力を添へん」

と夕雲の、行方も知らず失せにけり

「アラありがたや尊やな。これぞひとへに氏神の擁護の功力」

と宗近が、心勇みて立帰る

宗近装束改めて、設けの壇に上りつゝ、幣帛捧げ礼拝なし

「今大君の詔、御選みに預かる事、これ私の功名ならず、ひとへに氏神稲荷の神、擁護の徳によつてなり。さあならば十万恒沙の神仏、骨髓の丹誠を納受あつて、たゞ今の宗近に力を合せてたび給へ。謹上再拝」

一心不乱祈願の折から

虚空遙かに声あつて

「いかにや宗近。勅の剣打つべき時はたゞ今なるぞ。頼めや頼め、たゞ頼め」と壇上に現れ三拝の、膝を屈して直りける

秋更けて、夜寒の衣うつこにも、露か時雨か紅葉葉の、焦がるゝ色とわが心。

「打てや〜」

と、鉄とりのべ、教への鎚をはつたと打てば、ちやうと相鎚、ちやうくく打重ねたる鎚の音、天地に響きとおびたゞし。

陰陽和合たちどころに、打奉る御剣の、表には小鍛冶宗近と、裏にはしるく小狐と、打つも妙なる神宝。天の叢雲かゝるとも、むらぐ雲の乱れ焼き、匂ふばかりの金色は、霜夜の月に照添ひて、いと潔く見えにける。

「勅命の御剣、たゞ今成就仕る」

と恭しく捧ぐれば

道成欣然と領承あり。

「ホ、ウ、いしくも打奉りしものよ。天下第一二つの銘。アラ心地よやこの剣、小

狐丸と名付くべし。かゝるめでたき御剣を、わが心ぞとその身にしめ、いよく民
草打ち集ひ、世は太平と乞願ひ、豊かに励む生業の、五穀成就や君万歳
と伝ふる鍛冶の道ひろく

「なほ行末を守るべし。これまでなり」

と言ひ捨て、また叢雲に飛び移り、稻荷の峰にぞ帰りける